

水産海洋地域研究集会

シンポジウム「対馬暖流域における海洋環境と漁業資源の中長期変動」

岸田達、白石學(水研セ日水研)、大下誠二(水研セ西海水研)、井野慎吾(富山水試)、宮原一隆(兵庫但馬水技セ)

2007年11月9日(金)、新潟市コープシティ花園ガレソホールにおいて標記シンポジウムが開催された。青森県から山口県に至る日本海側各府県水産研究機関および水産総合研究センターの海洋・資源研究者を始めとして66名が参加した。午前10時から午後5時にかけて、レビューや最近の知見に関する9題の発表と総合討論を行った。

主催者挨拶の後、コンビーナーを代表して岸田が趣旨説明を行った。最初のセッションとして、海洋環境の中長期変動に関して2題の発表があり、加藤・山田・渡邊(水研セ日水研)から1988・1989年頃と1997・1998年頃に表層における変化があったこと、能登半島の東西で表層の変動機構が異なる可能性が指摘された。また、千手(九大応力研)は日本海固有水のゆらぎが地球環境変動にตอบสนองしていること、北半球の10年スケールの気候変動と相関があることを示すとともに深層での水温上昇、溶存酸素量低下傾向が見られることを示した。

次のセッションでは漁業資源変動と海洋環境変動との関係のレビューに関して5題の発表が行われた。田・木所・渡邊(水研セ日水研)は、1980年代末の水温上昇に伴い暖水性浮魚類が増加し、冷水性底魚類が減少したことを示し、環境変動に伴い魚類群集が変化したことを報告した。木所はスルメイカ資源量が寒冷な環境で減少、温暖な環境で増加する傾向があり、レジームシフトにより産卵時期・場が変化することにより資源量が変化する仮説の検証が行われていることを紹介した。大下(水研セ西海水研)は、対馬暖流域と太平洋海域のマイワシ長期資源変動が同一の環境要因に支配されていることが示唆されていること、海域ごとの差については海洋環境や生物特性について精査が必要であることを述べた。井野(富山水試)・奥野(石川水総セ)・前田(福井水試)はブリの移動・回遊パターンの変化が漁況変動の要因と推測され、その変化が海洋環境と密接に関連があることを示した。宮原(兵庫但馬水技セ)は、ソデイカの兵庫沖来遊資源量と海洋環境、分布と水塊配置に関係があることを示し、九大応力研の日本海循環モデルを用いた中短期漁況予報を紹介した。

次のセッションでは最近の事例について紹介が行われた。井上・和田(京都海洋セ)は、サワラの漁獲が近年増加し、海洋環境の変化との関係が推測されること、推測に基づく仮説と研究の必要性を紹介した。倉長(鳥取水試)は、日本海西部海域の底魚類について、海況と関係が認められる種類についてレジームシフトとの関係も交えて事例を示し、資源変動と海洋環境変動との関係解明が資源管理上必要であることから研究を計画中であると紹介した。

最後の総合討論では、レジームの交代時期(そろそろ変わってきているか否か)、資源と環境とを繋ぐ動物プランクトン研究の必要性、定量的なデータセットの必要性、などに関して活発な討論が行われた。

